

エスニック・マイノリティの他者性をめぐる闘い

——フランスの北アフリカ系移民二世のイスラーム教徒を事例として——

京都大学大学院 山下泰幸

1. 目的

現在のフランス共和国は、470万人にもものぼる欧州最大のムスリム人口を有するエスニック的な多様性に富んだ国であり、その中には旧植民地である北アフリカ三国（アルジェリア、モロッコ、チュニジア）からの移民の子孫がとりわけ多く含まれている。しかし同時にフランスは、文化的差異を強調するレイシズムとしてのイスラーム嫌悪が吹き荒れ、排外主義的な極右が台頭する国でもある。これまで、社会学的な研究においてフランスのイスラーム教徒が対象化される場合、「貧しく、社会的に統合されない郊外の移民およびその子孫」として扱われることが多かった。しかしながら徐々にだが確実に増加しつつある社会・経済的に成功する高学歴・ホワイトカラーのムスリムの存在を鑑みると、彼らの置かれている社会的状況を一枚岩的に捉えることは適切ではない。そこで本研究では、これまで比較的検討されてこなかった北アフリカ系のイスラーム教徒内部における多様性や差異もしくは断絶に光を当てる。特に成功するマリノリティとしての一部のムスリムたちの重層的に決定された社会的配置と、フランス社会における他者性を巡る闘いの中で彼らを取りうる戦略について分析する。

2. 方法

本研究では、北アフリカ系のフランス生まれの高学歴・ホワイトカラーのムスリムを対象に、2016年および2019年にパリにて実施したインタビュー調査データを用いる。ここではムスリム間の差異や断絶は、実体的な社会経済的的概念としての階層的な観点から分析されるのではない。そうではなく、社会・経済的に成功するイスラーム教徒たちが、社会的に構築された「郊外の貧しいイスラーム教徒」というステレオタイプによって語られがちな「より疎外された」人びとについて、いかに語るかという点から分析される。

3. 結果

成功を収める新しい世代のムスリムたちは、イスラームそのものを高く評価しながらも、一方で彼らは「より徹底的に疎外された」ムスリムと自らを差異化し、他方でその経験の共通性を語る。そこでは例えば、「郊外」に蔓延する家父長的な文化およびイスラームの解釈への批判が積極的に行われたが、また同時にフランス社会のイスラーム嫌悪を回避することの困難が述べられた。

4. 結論

アンビヴァレントな立ち位置の彼らが、フランス社会における他者性を巡る闘いにおいてとる複雑な戦略の分析を明らかにする本研究は、こうしたムスリムの存在それ自体が、ムスリムたちが有するとされる本質的差異を言い立てるイスラーム嫌悪的言説の無根拠さを露呈させるものである。